欧州アルプス　隠れた穴場ハイキング三題（紹介）

2019 年 7～8 月　　大塚 忠彦

2019 年夏の欧州アルプス山行のメインイベントはモンブラン山群の氷河／ヴァレ・ブランシュ（白い谷、別稿参照）の縦断登下降であったが、日程的には 20 日間弱滞在の大部分をグリンデルワルト、ツェルマット、シャモニーの近郊ハイキングで過ごした。それぞれの地に各 5 泊して歩き回ったが、その中で隠れた穴場とでも言えるようなハイキングコースをそれぞれの地域から各一つ紹介したい。
これらのハイキングコースは、日本のガイドブックにはあまり紹介されていないものである。

［1］シーニゲ・プラッテ（Schynige Platte、インターラーケン近郊）

グリンデルワルト近郊というよりもインターラーケンの直ぐ隣町と言った方が正しいが、グリンデルワルトから流れ出しているリュツェンタール（渓谷）とブリエンツ湖に囲まれた山塊がインターラーケンの隣町ヴィルダースヴィルで平地に降りる末端の部分がシーニゲ・プラッテで、標高約 2,000m の丘陵地帯である。高山植物園とホテルと牧場があり、その中をハイキングコースが縦横に走っている。
プラッテというのは“大皿”の意味で、この辺一帯が山稜に囲まれた小盆地からの命名であろう。

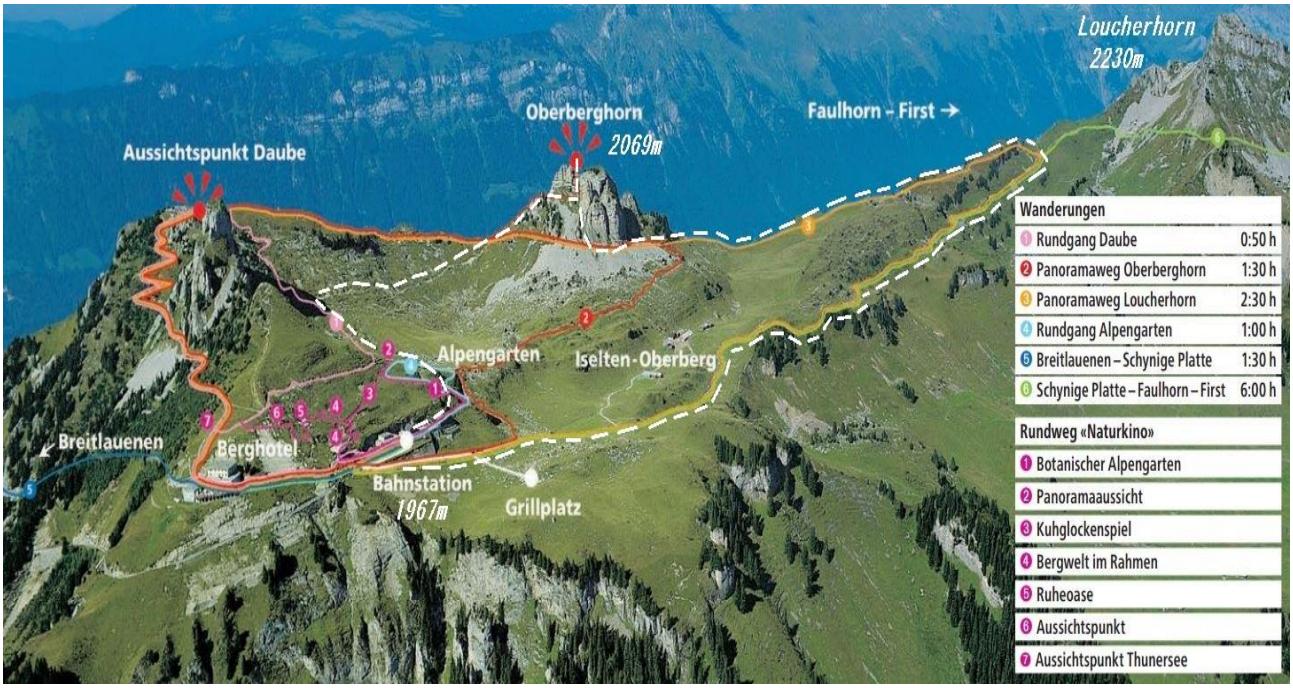
鉄道王国スイスでも一番早い時期に開通したシーニゲ・プラッテ登山鉄道は、よくぞこんな急斜面に線路を敷いたものと思われる断崖絶壁をヴィルダースヴィルから約 1 時間でシーニゲ・プラッテまで運んでくれる。断崖絶壁と言えば、電車の窓から下を見ても足下には空間があるだけで地面は何も見えず、遥か下界にブリエンツ湖やトゥーン湖のさざ波が陽光に光っているだけであった。

このおもちゃのような登山鉄道は、往時のヨーロッパ諸国の王侯貴族を彼らの避暑地であったシーニゲ・プラッテまで運ぶために敷設されたものだそうだ。往時の王侯貴族が如何に権力と金力の持ち主であったかが分かろうというもの。

（おもちゃのような登山電車で上る。奥には左からアイガー、メンヒ、ユングフラウのベルナーオーバーラント 3 山が指呼の間に望まれる。現地観光局の HP から引用）　（内部はレトロなトロッコ電車）

終点駅のシーニゲ・プラッテ付近には 500 種類以上の高山植物を集めた広大な高山植物園(Alpengarten）があり人気が高いそうだが、その方面に知識と興味の無い小生には猫に小判であった。それよ

りも、“大皿”の縁や底や牧場の中を縦横に走っているハイキングコースの方が素晴らしかった。



上の鳥瞰図は、現地にあった案内板である。この鳥瞰図の範囲が謂わば「大皿」に当る。奥の稜線の向こう側の断崖の麓（紙面の裏側方向）にインターラーケン、ブリエンツ湖、ツーン湖があり、紙面の手前側にリュツェンタールを挟んだベルナーオーバーラント３山やグリンデルワルトの村がある。

奥の稜線には図示されている如くハイキング・トレイルが走っており、この稜線からはベルナーオーバーラント３山の連嶺と、その反対側にはインターラーケンの街やそれを挟んで対峙しているブリエンツ/トゥーンの両湖が同時に見えることで人気が高い。切り立った稜線ではあるが、トレイルが良く整備されているので、ファミリーハイクの子供連れも多い。

我々は、グリンデルワルトから登山電車（BOB=Berner Oberland Bahn）で下ること 30 分、シーニゲ・プラッテ登山鉄道の始発駅 Wilderswil 駅でトロッコ電車に乗り換えて断崖絶壁と深いガスの中を走ること１時間、やはりガスが漂う“皿”の真ん中のシーニゲ・プラッテ駅に着いた。すぐ傍に乳牛の牧場があり、朝食に出勤する牛君達の鳴き声とカウベルの響きが長閑に聞こえる桃源郷であった。

（長閑な乗換駅、ヴィルダーズヴィル駅）

（このトロッコ電車に乗り換えてシーニゲ・プラッテ駅へ）

（ガスが湧くシーニゲ・プラッテと牧場）

この皿の縁と底には沢山のトレイルが整備されていて、上の案内板には代表的なトレイルが記されていた。我々は駅を出て高山植物園を抜け、白色破線で付記したルートを廻ってまた駅に戻った。このトレイルには、緑の草原あり、切り立った断崖あり、お花畑ありの変化に富んだコースだった。

特に、稜線の途中にあるオーバーベルクホルン(2069m)は岩山で、ザラザラのザレ場に続くガラガラの急なガレ場、最後は凹部の２段の垂直な鉄梯子を登って絶巓に抜けるというルートになっている。絶巓は、ハアハア言いながら登った苦労を帳消しにしてくれるほどのビューポイントの筈だが、この日は五里霧中で足下から霧が湧いて来るばかりで、インターラーケンの街もアイガーなどのベルナーオーバーラント３山も全くガスの彼方であった。

湧き昇って来るガスで体が寒く、飴玉ひとつ咥えただけで早々に退散したが、下りの急なザラ場やガラ場では、石車に乗って転倒・滑落しないように気を遣ったので足がガタガタになった。オーバーベルクホルンを降りてからはローチェルホルン 2230m の手前で“皿”の南縁の稜線を伝って出発点のシーニゲ・プラッテ駅に戻った。３時間ほどの行程であった。

（オーバーベルクホルン、鞍部下の建物は牛舎）

（オーバーベルクホルン、中央の凹部を登る）

このオーバーベルクホルンからローチェルホルンを経由してグリンデルワルト近郊の著名な奥山であるファウルホルン、バッハゼー、フィルスト経由でグリンデルワルトに戻るというロングコースもあり、こちらは 9～10 時間のロングランとなるが、グリンデルワルトの最もポピュラーなハイキングコー

スの一つに繋がるものなので、それなりに興趣あるトレッキングとなろう。

帰りの登山鉄道ではガスも晴れて来て、断崖絶壁を走る車窓からインターラーケンの街やブリエンツ、トゥーンの両湖が足下に眺められた。

（帰路の登山電車の車窓からブリエンツ湖が見えた）

（オーバーベルクホルン頂上からダウベ峰方面への稜線縦走路を見る。切り立った絶壁にガスが湧いていた。下側に安全な道も見える）

［登山日］　2019 年 7 月 29 日

［参考/現地 HP］

https://swissfamilyfun.com/schynige-platte-panorama-trail/

［2］トゥリフト（Trift、2337m、ツェルマット近郊）

ツェルマットの村からは、ツェルマットの谷の南東側丘陵地帯であるゴルナーグラート、スネッガーやロートホルン、またマッターホルンやブライトホルンへの登路があるシュバルツゼーやクラインマッターホルンなどへは、登山電車やケーブルカー、ロープウェイが発達していて、特に登山電車 1 本で行けるゴルナーグラートはマッターホルン、モンテローザなどの雄姿を目の前に眺められるので非常に繁盛している。

その一方で、ツェルマットの谷を挟んだ対岸の北西側の丘陵地帯は極く一部を除いて荒々しい岩塊の連続で、ロープウェイやリフトはおろか、ハイキング径も全く無いという岩山の連嶺である。対岸のゴルナーグラートやロートホルンなどからこの山塊を眺めると、ゴツゴツした味も素っ気もないような岩山の奥には雪を被ったツィナルロートホルン 4221m やヴァイスホルン 4505m の連嶺が並び、これはこれでなかなかの山容であるのだが、残念ながら“悪魔の棲む山”の状態のままである。

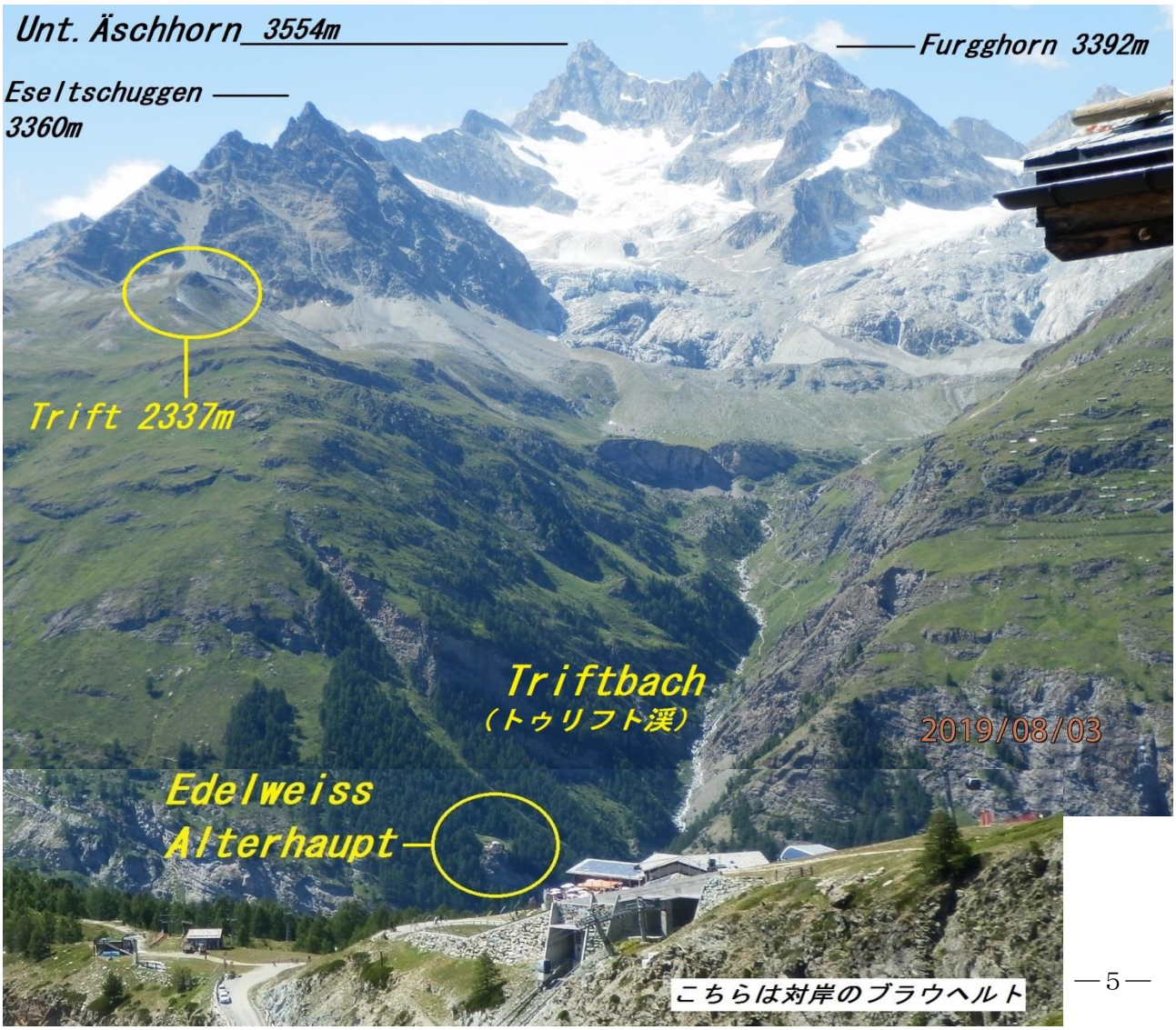
そのような中でも全く登山道が無いのかというと、標高は低いながら 3 千㍍級の残雪の山、メッテルホルン、プラットホルン、ウンターエッシュホルン、ロートホルンヒュッテなどには登山道が通じている。これが上で書いた極く一部の山々である。

さて、ツェルマットに泊まったことがある方々は、ツェルマット駅のすぐ先のメイン通りの右側の山腹の樹林帯の上の断崖に夜になるとそこだけポツンと灯火が燈っているのをご覧になったことがあると思う。実はここはエーデルワイス山荘という山上のレストランで、これから紹介するトゥリフトと呼

ばれる展望台(2337m)への登り口に当る場所である。下の写真は、スネッガーの上部・ブラウヘルトから撮影したトゥリフト附近の写真である。撮影したブラウヘルトも目標のトゥリフトもほぼ同じ標高である。エセルチューゲン、ウンター・エッシュホルン、フルグホルンの連嶺とそれらに囲まれ氷河を懐いたトゥリフト圏谷（下の写真の白い圏谷）の眺めは、対岸のゴルナーグラートから眺めるモンテローザやゴルナー氷河の眺めに較べれば規模は小さいが、これはこれなりに立派なものである。

また、スイスでは何処に行っても山岳鉄道やケーブルカー、ロープウェイが発達していて、ついついこれらの乗り物に乗ってしまうが、この乗車代が全く馬鹿にならないほど高額であるから、ハイキングでも１日当たり１～２万円の交通費が吹っ飛び、たちまち懐もどこかに飛んで行ってしまうという寸法になる。そういう意味でも、ここトゥリフト圏谷は乗り物は全く無いので身体的にも精神的にも極めて“健康的な”１日を過ごせると言う訳であるし、多少の懐具合が余れば、下山後にツェルマットの街角の立ち呑みバーでスイスビールやスイスワインの一杯でも楽しめるというもの。

従がって、道中で会う人々も孫子供連れの近所のオバサン連中のウォーキング組や、上の岩場に練習に行くクライマー、白い奥山を狙うガイドパーティーなど、ほんの一握りの人達しか行かないから、対岸のような観光名所の混雑とはエライ違って、誠に静謐なものだった。



（ツエルマットの村を挟んだ対岸のブラウヘルトからトゥリフト圏谷を望む。２枚の写真を上下合成）

さて、我々も懐が悲鳴を上げ出した或る日ここに登って行った。投宿していたツェルマット駅前のホテルからツエルマットの大通りを少し上がった銀行の角から右側の山の急斜面に取り着くのであるが、この入口が分かりにくかった。路上にはTrift方面を示す標識も無く、これから登る街路であるTriftweg（トゥリフト通り）という道標も見当たらなかった。犬を散歩させているオバサンに聞いたら、この道ですよと教えてくれた。大通りから一気に丘の急斜面を登るウネウネと曲がった急坂で、朝一番の身にはハアハアと堪えた。やがて、民家の塀にTriftwegと書かれた標識が設置されていて一安心した。

（牧場付近。中央の渓がトゥリフト渓。左の山の天辺右の小さく見える白い建物がエーデルワイス山荘。トゥリフトへはこの渓を渡って、エーデルワイス山荘の傍を経由して行く）

路傍の民家やシャレーの窓には綺麗な花が飾られていて、それらを見物しながら登って行った。やがて脚下にツエルマットの街並みが見えてきて、回りは大きな牧場となった。

牧場のドンヅマリまで登ると、道が右側岩壁方向へのトラバース道と、左の渓筋に入る道に分かれた。渓筋への入り口には通行禁止のテープが張ってあった。右側岩壁方向への道は山腹のトラバース道で、徐々にツェルマットの村に降る道のようだった。ロープを持って登って来たオジサンさんに聞くと、右へのトラバース道はこの先のクライミングゲレンデに通じるものだそうで、トゥリフト方面へは渓に入る道ではないかと教えてくれたが、トゥリフト方面への道は自信が無いようだった。

（通行禁止のテープが・・・）

そういえば、この奥の高峰のツィナルロートホルンに登るという重装備のガイド氏もこの通行禁止のテープの道に入って行ったようだったナァ～。ガイドほどのベテランが道を間違ったり、通行禁止の道に踏み込むハズもないのだが・・・？？。

軽装の地元風の若者が登って来たので、彼等にも聞いて見たがハッキリした答えは無く、彼等も禁止テープを見て引き返して行った。Strangerは困りにケリな・・で、2.5万図は持って来ているが、それ以上の資料は持ち合わせていない。現地HPも事前にチェックしてきたが、そのようなことは書いてなかった。

周囲をあちこち偵察してみたが、トゥリフト方面への道らしきものは、この道しかないようだった。

仕方がない、この先がどうなっているのかを見るしかない。その結果は下の写真のようなもなだった。

左写真の如く、右写真にあった木橋が影も形も無くなっていた。鉄砲水で流されたのであろう。この橋の残骸はこの下流 200m くらいの崖に引っ掛かっていた。何とか徒渉できないかと何カ所かをトライしてみたが、水流が早くてロートルは急流に流されて溺れるか身体をあちこちにぶつけられてマリア様のお招きに与ること必定のようであった。

近くに建てられていた警告版（右写真）は、今回の木橋流出による通行禁止を示すものではなく、木橋があった当時からのものらしく、上流にある水力発電施設の急な放流によりいつ増水するか分からないので、河床を徒渉することを禁じた警告であった。

実は、一旦ツェルマットの街に下りてから、もう少し先の別の地道を登り返せばこの橋を渡ることなく直接渓の右岸に入れたのであるが、その時はこのことに気付かなかったのが残念であった。

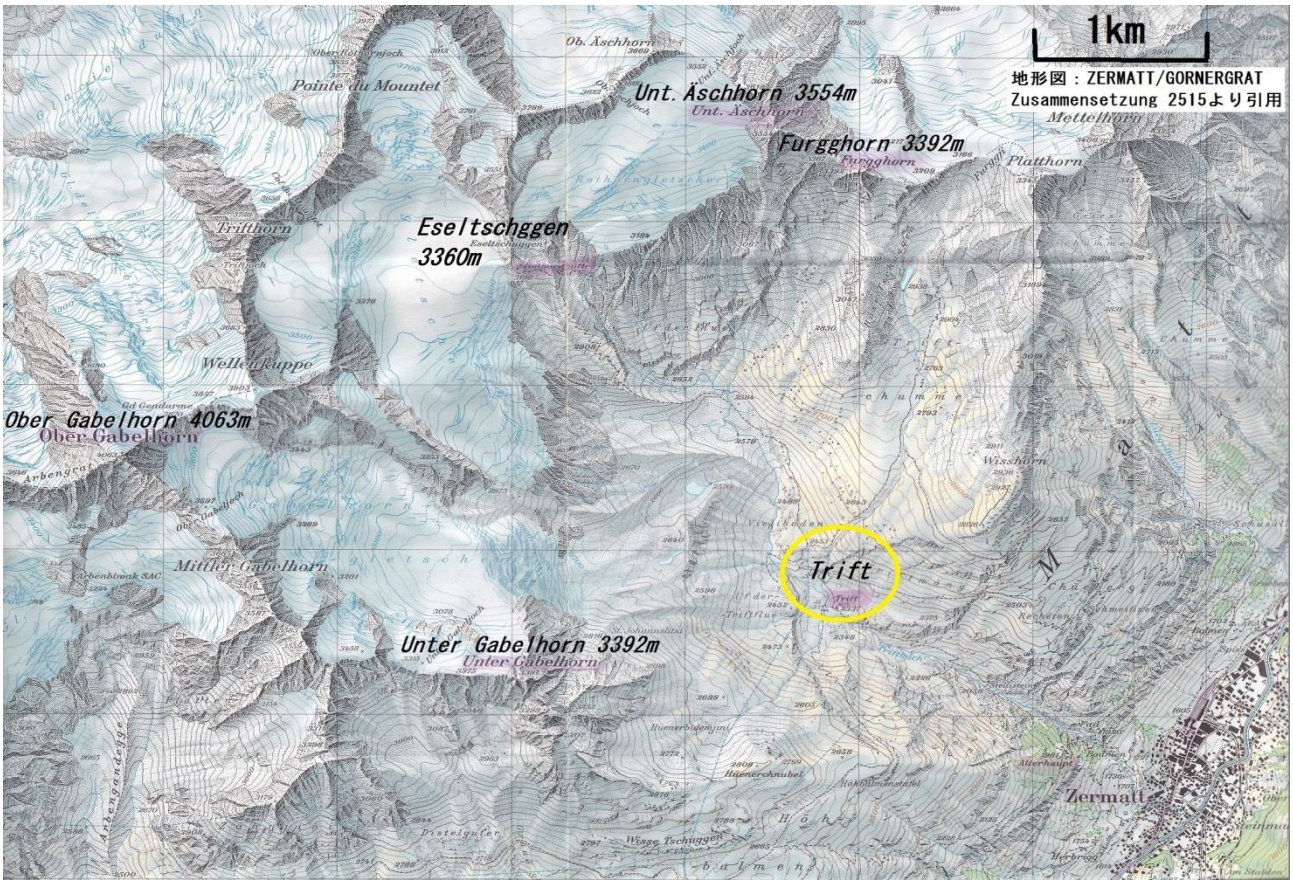
ツェルマットからトゥリフトまでを往復するだけならゆっくり歩いても 3～4 時間の半日コースであるが、トゥリフトからオーバーガーベルホルン 4063m の中腹の登山道をツムト渓谷沿いにマッターホルン北壁に突き上げるツムト氷河まで歩けば、より充実した 1 日コース（所要約 10 時間）となろう。ただし、このコースは殆ど人に遇わないコースであるから、充分な準備が必要である。

最後に、トゥリフトからツェルマットの村を挟んだ対岸の観光地ゴルナーグラート方面を眺めた写真を引用しておく。このトゥリフト渓谷が如何に深い渓であるかが読み取れよう。

（⇒）トゥリフト渓谷から対岸のゴルナーグラート方面を眺める。背景の雪の山は、右がモンテローザ 4634m、その左のピラミッド２本がリンプフィッシュホルン 4199m、アラリンホルン 4027m である。

マ、ここはロープウェイ料金も掛からないし、保冷袋にスーパーで買った缶ビールとサンドウィッチかサラミソーセージでも持参すれば、これはもう山上の清談となること間違いなし。

10 スイスフラン程度の懐で、充実したトレッキングが楽しめるというもの。
どうぞ皆さん、ツェルマットを訪れた時には、観光客で大混雑している大通りの人混みだけではなく、このような桃源郷や、ひっそりした地道や登山道、更に夜の裏町を歩いて頂きたい。



［登山日］2019 年 8 月 3 日
［参考/現地 HP］　http://www.hikingwalking.com/destinations/sw/sw_valais/zermatt/trift

［３］モン・チェティフ（Mont.Chétif、2343m、イタリア・クールマイユール近郊）

モンブラン山群のあるフランス・シャモニーまで足を伸ばされた方は、モンブラン・トンネルを越えた国境の隣町イタリアのクールマイユールに行かれた方も多いと思う。また、クールマイユールはトゥール・ドュ・モンブラン（TMB）のコース上の街でもあるので、TMB で立ち寄られた方も多いのではあるまいか。

そのクールマイユールの街の直ぐ近郊の丘陵にこんもりとしたオッパイ型の岩山があり、標高は低いがイタリア側からのモンブラン山群の絶好の展望台となっている。モン・チェティフという。
フランス（シャモニー）側からのモンブランは雪に覆われた優雅な雪山の山容であるが、イタリア側からはギザギザの針峰の山巓に氷河が張り付いていて、まさに“魔の山”の様相をみせている。

クールマイユールの街はシャモニーの街から国際バスに乗り、モンブランのドテッ腹を突き抜けているモンブラン・トンネルを抜けて小１時間も走れば到達できるし、そこからこのオッパイ山に登って、日帰りでシャモニーに戻って来られるので、シャモニーで時間に余裕のある方は是非この山からモンテ・ビアンコ（モンブランのイタリア側の呼称）の凄まじい山容を眺められたら如何であろうか。

ただ、クールマイユールの街からこの山に登るには、ロープウェイを降りてから全く日陰の無いバラス道を大汗と埃にまみれて歩かねばならず、また、登山道に入ってからは結構歩きにくい岩稜帯もあったりするので、車で入れる Courba Dzeleuna(標高 2048m)というスキーリフトの終点（レストランがある実際の登山道の始点）まで車で乗り入れられる地元の人々以外はあまり登っていないようであった。

（モン・チェティフ、中央の乳首）

（クールマイユールの街からも大きく見える）

（クールマイユールの町からはモンブラン山群のイタリア側の稜線も見えた。シャモニー側からの優美な山容と異なり、人を寄せ付けない“魔の山”の姿を見せていた）

さて、生まれて以来運転免許証なるものを持ったことが無い我々２人組は、公共交通機関（国際バス）とロープウェイ＆夏季もやっているスキーリフトを乗り継いでその終点から車道のバラス道を歩き始めたが、太陽を遮る日陰一つなく猛暑の汗と埃にまみれて全く往生した。

多少煩瑣であるが、シャモニーを出てクールマイユールのロープウェイに乗るまでのルートを若干補足しておく。

シャモニーの（国際）バスセンターは現在建て替え中でちょっと分かりにくい。沢山のバスベイが並んでいる訳でもなく、大きな発券窓口や待合室も無いただの路傍のバス停といった風情で、切符も小さな工事現場事務所風の掘立小屋にただ一つ開いていた申し訳程度の窓口で買うのであった。早朝だったので係員も乗客も誰も居ず、聞こうにも聞けずで往生した。案内表示板など類も全く無かった。

場所はシャモニーの中心街から歩いて 10 分、エギュ・ドュ・ミディ行のロープウェイ下駅の近くである。シャモニー・クールマイユール間往復の切符は 22€。ただ一人居た係員の発券嬢は可愛い親切なネエちゃんで、バスセンターの不親切極まりない不便さを償って余りあった。

クールマイユール行のバスは、シャモニーの町から少しの間高速道路を這走って直ぐにモンブラン・トンネルに入る。フランス・イタリア国境はこのトンネルの真ん中辺りにあるハズだが、同じ EU 内であるからパスポートチェックなどというものも無い（逆に、帰路ではイタリア側のトンネル・ゲートで）イタリア警官が乗り込んで来てパスポートの提示を求めた。ただ、チェックはいい加減でパスポートの中身を見ることもせず、「じゃぽねーぜネ、コンニチハ、OK ヨ」というだけだった。白人はチェックしていないようであった。或いは、イタリア側からの特定の有色人種のフランス違法入国だけを特別に警戒しているのかも知れない。

トンネル内は 30 分間ほどの走行でイタリア側の出口 La Palud に出る。雨と霧ばかりの陰鬱だった空模様のシャモニーから来ると、如何にも陽光溢れる明るい南欧という雰囲気が一気に開けた。モンブラン山群を隔てただけで、こうも天候が変わるのであろう。

ここからクールマイユールのバスセンターがある中心街までは 10 分間ほどである。ロープウェイの乗場が分からなかったので、観光案内所の可愛いネエちゃんに聞いたら、地図やパンフレットを持って来てくれて親切に案内してくれた。ここも、中国の団体ツアーが多かった。彼らは団体を為すと大声で喚いたり、周りの迷惑顧みずであるから、全く困ったものだ。スイスやシャモニーでも不興をかっているようだ。

（クールマイユール中心街のバスセンター＆広場）

（広場にあったアイゼンの大きなモニュメント。半世紀以上世紀前の遺物？）

ここから川の反対側に渡って20分も歩くと、古色豊かなドローネという集落に着く。ここからプラン・シェクルイというプラトー迄ロープウェイで登るのであるが、そのロープウェイの乗り口が分かりにくくウロウロと探していたら、地元の人らしいオジサンが通り掛かって連れて行ってくれた。

プラン・シュクルイからはスキー場の横の長い斜面を歩いて登るコースもあるが、ここも太陽を遮る物が無いバラス道なので、更に上部の鞍部に繋がっているスキーリフトに乗ってコル・シェクルイまで登った。このコルはTMBの途中のコースでもある。このリフトはスキーリフトであるので、このシーズンにはガラガラで、上のリフト降り場に居た係のオジサン（１人だけ）は全く暇そうにしていたので、これから登るモン・チェティフまでの道を聞いたら、丁寧に指し示してくれて、マ、登り２時間ほどだナと教えてくれたが、これは元気な若者向きのタイムであることが後で分かった。

さて、コル・シェクルイにあるレストラン（Maison Vielleという山荘）の花で飾られた庭のパラソルの涼しそうなビールを横目で恨めしそうに眺めつつ、猛暑のバラス道を大汗を掻きながら登って行った。この道からは足下のクールマイユールの町並みがよく見えた。重畳たる山なみが重なっているが、この谷のズート先の方がシャモニーからの国際バスの終点イタリアのミラノである。

（足下にはクールマイユールの町並みが・・・）

バラス道の埃で汚れた大汗を拭いつつ、牧場の作業道のような車道を下ったり登ったりして歩いて行くと、やがて稜線の峠のような所に出て一気に雪の山が目に飛び込んできた。モンブラン山塊をイタリア側から眺められるモン・チェティフ峰の登り口に当るCourba Dzeleunaというスキー場リフトの終点であった。

さて、ここからゴロタ道のキツイ登りとなった。一応は樹林帯の中ではあるが崩壊した急斜面であったり大岩がゴロゴロした急坂であったので気が抜けなかった。この辺りは帰路には足が笑って往生した。

（峠から一気に雪山の姿が・・・。モンブラン山稜のイタリア側が見えた。
左の小屋の向こうの大きな山がモンブランであるが、頂上は雲の中）

（このような道を登っていくと・・・）

やがて登山道はモンブラン山稜とクールマイユールの町の両方が見える稜線となった。
欧州アルプスの道標も、フランスからイタリアに入ると表示の表現も変わってきて、下の写真のような簡単ではあるが、直接的表現になった。どこかのバス停のような微笑ましい道標。

（⇒チェティフ）

（地点番号と行先を示す矢印[左の岩]。後方はモンブラン主峰）

モン・チェティフの肩に近づいた頃に、クライミングの岩場が出て来た。何パーティーかが取り着いていたのでここの岩場のグレードを聞いて見たら、フレンチ・レートで 6a から 6b 程度で、6c まではいかないだろうとのことだった。日本で使われているヨセミテデシマルでいうと 5.11a 程度迄であろうか。

（↑岩場で練習に余念がないクライマー）

（←岩場の左奥に見えるのがモン・チェティフ
歩いている人物は相棒）

（↑肩からは本当にオッパイ型に見えるモン・チェティフ）

（肩からオッパイに入ると、少し岩稜帯を行く⇒）

肩からは、モンブラン山稜とクールマイユールの町の両方が見えた。

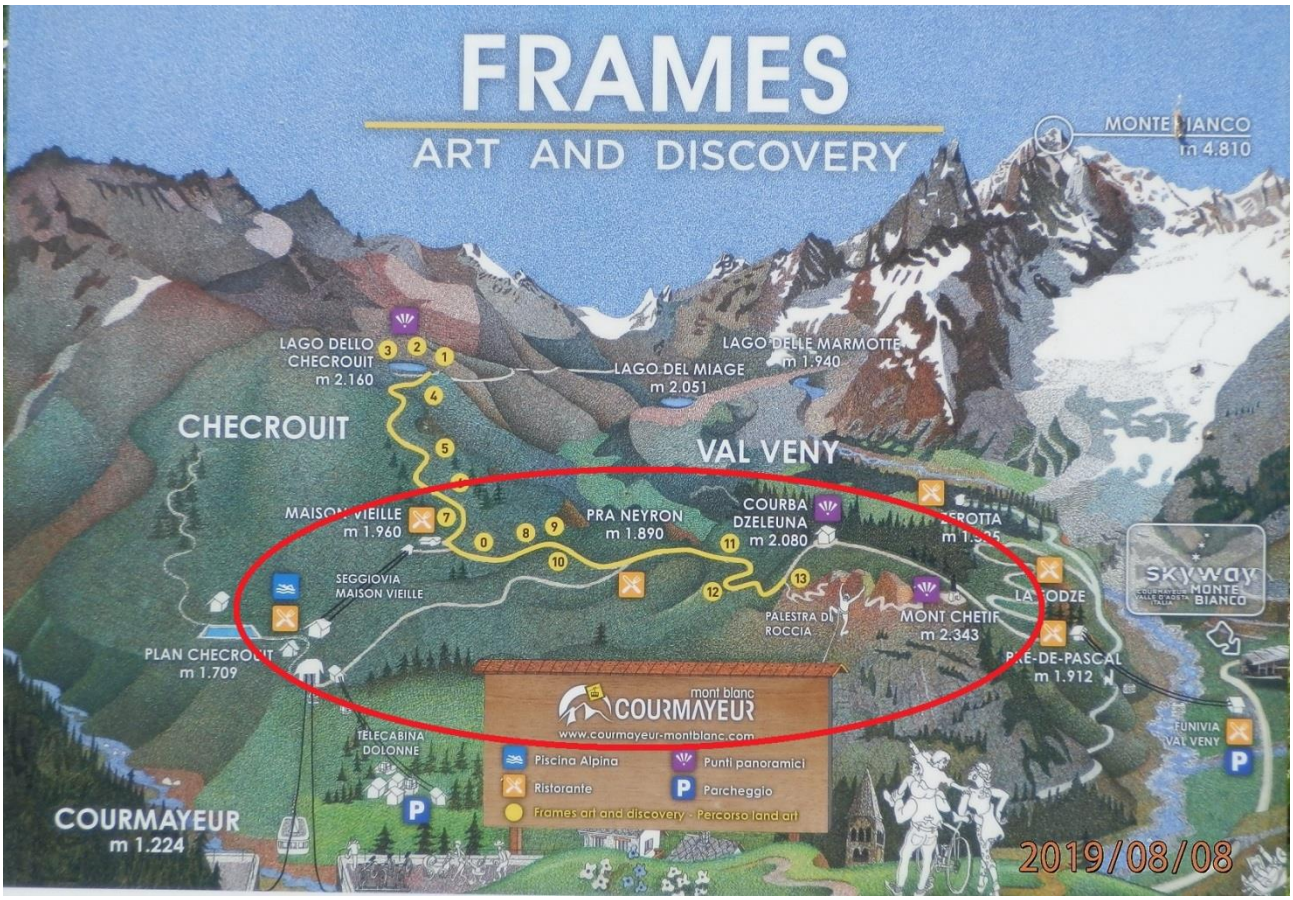
（肩から見えたイタリア側モンブラン山群。左奥の雲の中が主峰モンブラン。大きな氷河はモンブラン・イタリア側のブレンヴァ氷河）

（肩からはクールマイユールの街も足下に見えた）

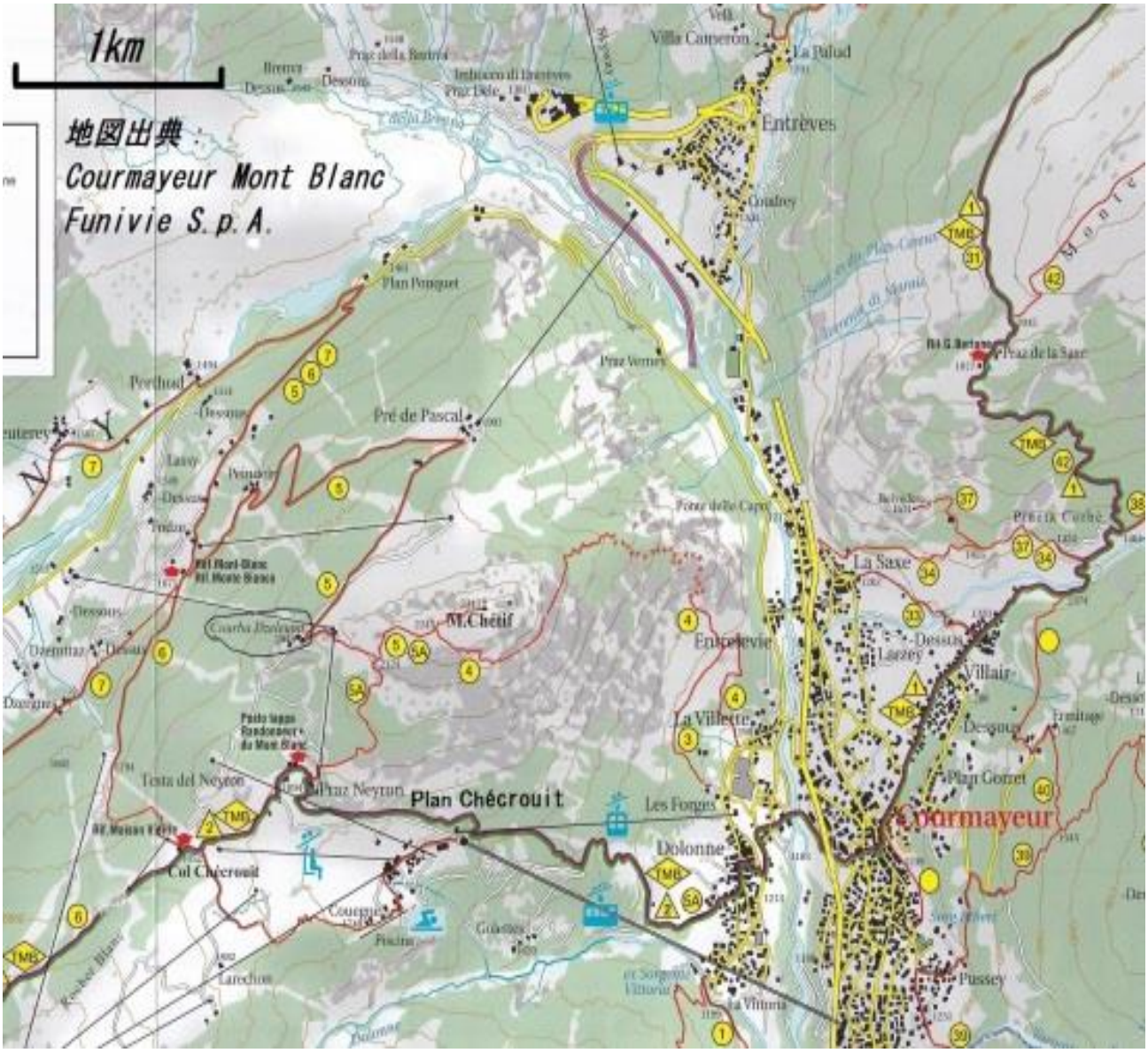
山頂にはマリア像が祀ってあったので、懺悔してみたが、マ、異教徒には験は無いであろう。

さて、このコースの紹介は以上でオシマイであるが、現地にあった道標に今回歩いたコースを付記しておく（下図、赤楕円）。

大まかな所要時間は、リフトを降りて歩き始めたコル・シェクルイからモン・チェティフに登り、プラン・シェクルイに下山するまでの歩行時間は、ゆっくり歩きのペースで約５時間であった。



また、コースの地図を次ページに示した。



［登山日］2019/08/08

［参考現地 HP］http://www.montblancmountainguides.com/mont-chetif/

（了）